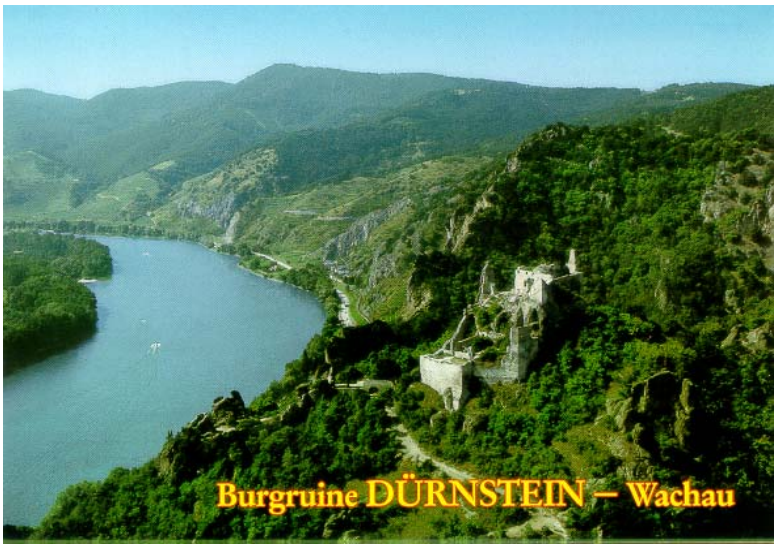
1.2. ウィーン便り（２）―― 国際原子力機関（ＩＡＥＡ）に勤めて：職場編後編（2001.3） ―――

日立事業所燃料サイクル部 小西俊雄

オーストリアは 1996 年に建国 1000 年祭を迎えた。ウィーンをかすめるドナウ河を車で小一時間溯るとクレムスという美しくて古い街がある。その街の教会で発見された古文書に、オーストリアの古い名であるオスタリッチという言葉が 996 年の日付とともに残されていた由来による。その昔、東方制定を任務に神聖ローマ帝国の命を受けてバーベンベルク辺境伯が城を構えた地である。白ワインで名を売るバッハウ渓谷にある。このクレムスからウィーンまでのドナウ河遊覧船下りは人気の高いクルーズである。

クレムスからさらに少しドナウ河を溯るとデュルンシュタインがある。これも古い街で、川沿いの山の上に古城の遺跡がある。今は累壁の一部を残すだけだが、ドナウを見下ろす景勝の地として知られている。私も好きでたびたび出掛ける。この城は十字軍遠征の帰途に身の代金要求のかたとしてイギリスの王様が幽閉された城とされている。幽閉といっても当時からワインの名産地だったから、王様は身の代金到着をあまり喜ばなかったという伝説がある。



（写真、デュルンシュタイン古城）

ワインが美味しいのは良質のぶどうと水によるのは日本と同じ。ここに限らずウィーンの水も美味しい。ウィーンの水はアルプスの雪解け水を送水管で持って来る。皇帝フランツヨーゼフが市民のためにと寄贈した山麓の泉を水源として 1873 年に最初の送水管が稼動開始した。送水距離約 100 ㎞である。飲用として美味しく、日本人も安心して水道水を口にしてよい。

さて前回はＩＡＥＡの歴史や組織等少し堅い話になったので、今回は個人レベルの環境を中心に書きたい。

・職場環境

国際機関だけに大小の会議への参加者も含めて耳目に接する人種、言語が実に多彩である[1]。私の所属する原子力技術開発課だけでも出身国籍は十指を越える。それだけに文化も多様で、業務のやり方でも「常識と非常識」が交錯する。私も初期の頃は何度も戸惑った。新着任者にはオリエンテーション的な導入教育があるものと決めていたらそんなものはない。予算資料や他部門との事前の検討合意文書も系統だった説明がないままいきなり業務開始。手探りで書類を作成すると、「それはこの文書に背景が詳しく書いてある、なぜ請求しないんだ」という。書類自体の存在を知らされずに請求できるものかと目を回したものだ。外部からの会議出席者や会議を運営しているわれわれスタッフの都合より、時に機関内部（いはば社内）の会議に急遽呼び出されたりもした。「国連文化」なのだと割り切るまでに多少時間を要した。「半世紀も日本人やってくると日本文化がしみついているのだなあ」と思った。

---

[1] 同じ原子力の国際機関 OECD/NEA に比較して、IAEA には開発途上国も参加しているので加盟国数が断然多い。その結果、職場の文化が多様化し業務の内容も多彩になる。環境として「より面白い」とも言える。

会議は多い。殆ど連日ある。大は国際会議から小は数人のコンサルタント会議まであり、運営を技術スタッフがつかさどる。日常業務で多いのは 10 人から 15 人程度の会合である。計画、準備、開催運営、記録報告と会議一連に時間と神経を使う。出席者の選定、事前の出席合意取得、日程調整、支給旅費の交渉等の準備が終われば一安心、会議の運営自体は、英語で進める以外日本での会議と違いはない。大事な点は、会議の着地シナリオを予め作っておくことでこれも日本と同じ。このことがその後の仕事のやり易さを左右する。（写真、専門家会議）

国連内は一種の独立都市で行政的にウィーンとは切り離された「国外」である。大袈裟に言えば治外法権地区であり、内部だけの警備組織、医療機関、銀行、郵便局がある。郵便はオーストリアとは別の国連郵便制度、固有の切手で投函する。当初それを知らずに国連切手を貼って市内で投函したら「切手無効」のスタンプで返送されてきたことがある。「国外」の職員だからオーストリアの税制も及ばない。給料を含め、売店の商品も一定の範囲で免税である。職員のための文化、スポーツ同好会も盛んである。私も利用しているので「生活編」でその一部を紹介する。

・休暇とホームリーブ制度

有給休暇は年間ではなく、各月二日半付与される。職員の勤務開始時点が一律でないため月間ベースの規定になっている。組織全体の一斉休暇はクリスマスの数日以外にないので、夏には各自業務を「調整」してバカンスに行く。その長さは想像を超えた。２週間、３週間は普通。部長や課長の要職が５週間ぶっ続けで不在と聞いて驚いたことがある。その間、書類決裁は滞るが「休暇優先」である。私は長い間の習性か、休暇後の机の上が気懸かりでなかなか長期休暇が取れない。公務出張の前後に休暇を加えて、私的旅行を楽しむスタッフが多く、私もこのタイプである。なお、病欠は特別枠。最近、父親の育児休暇も導入された。勤務時間は週 40 時間のフレックス制で普通だが、タイムカード制が今も継続されている[2]。フレックスタイムの一部として、一定の超過勤務時間が有給休暇に加算される。

休暇を利用しての旅行にホームリーブがある。これは外国人（つまり非オーストリア人）職員に認められている制度で、自分の休暇枠での帰国に旅費が支給される。２年に一度だが、母国とのつながりを維持できるようにとの思いやりである。「最低２週間滞在」が条件で、旅券の出入国印のコピーをその証明のため後日提出する。私は着任して１年半余りで初めてこれを利用して帰国した。久し振りの帰国だったので、旧職場は勿論、世話になった役所等の関係者や旧顧客、知人等への挨拶と忙しく過ごした。ホームリーブならぬホームワークの感であったが、久し振りのカラオケ[3]、旨い刺し身と堪能もした。

・職場と言葉（英語）

公用語は六つあるが主体は勿論英語。仕事は英語だけでできる。他の言葉も多少でも出来れば大いに助かる。使い方では私の場合は「書」に最も苦労している。「読」は時間で勝負、「話」が最も楽である。

先ず「話」。これは大抵の場合、相手もこちらの意図を理解しようという気持で聞いてくれるから助かる。

---

[2] 色んな文化背景の人種が「きちんと」労働環境を維持するためだ。
[3] ウィーンでは自宅のＣＤが教材である。年齢のせいか演歌が心を慰めてくれる。帰国時には旧職場の仲間

もともと非英語民族の方が多い環境だから、片言の言葉でお互いに理解する文化がある[4]。ところが会議は違う。一対一の会話でないから遠慮していると議論に置いて行かれる。多くの日本人が苦手とする場面だ。職員となると、業務報告や会議の進行も必要になる。私の場合は、趣味で続けてきた「トーストマスターズクラブ」でのパブリックスピーキングや会議進行役の訓練が大いに役立った。着任して間もなく国連内にもこのクラブがあることを知りすぐ入った。気障に響くが、片言の言葉でお互いに理解し合う環境ではかえって英語が下手になると心配になったのだ。このクラブについては「生活編」でも触れたい。

次に「読」。これは単純に時間の問題。大量の書類が流布して来るが、その重要性・緊急性を判断さえすればあとは日本人得意の頑張りで何とかなる。

問題は「書」。話せばすぐ合意できる内容を文章にするとなると、アメリカ人なら 10 分で書き上げる原稿に私は一時間も要したりする。しかも何度書いても直される。技術的な事を示してあとは秘書が、と言うのは単純だが現実にはそうは行かない場合が多い。前置詞や単複、時制といった文法則はともかく、「起承転結」、論理構成、曖昧さのない明確な言葉使い等に苦労する。これは日本語の文章力と深い関連があるはずだ。ＩＡＥＡの英語は英式が原則である。私も英式が基本なので抵抗は少ないが、文章が長くなりがちである。総会用の報告書は、一節一文になることが珍しくない。曖昧さを避けようと、定義的な挿入節を多用するからだ。綴は英式でも文構造は米式に共感を覚える。読む人に優しいと思うがどうだろうか[5]。

・三つの目標

勤務の延長と共に目標が増えた。着任した時は３年間勤務の目標として２年後の 1997 年に予定されていた「原子力を利用した海水淡水化国際シンポジウム」を滞なく企画運営する事が格好の目標であった。これは、その年５月に韓国大田で順調に終わり、事務局長として行った閉会セッションでの自分の挨拶が今も強い印象として残っている。自分の言葉に酔っていた。閉幕後のいわゆる慰労会で、地元の事務方と成功を祝って感動したのを思い出す。10 年前に勤めた日立工場大運動会Ｃ集団主将としての打ち上げ会時の感動に重なるものがあった。開催地の韓国が私の生まれた土地[6]である事も感動を高めた。

勤務が５年になると、それまでのＩＡＥＡでの検討成果を骨格として「原子力淡水化施設導入手引書」の刊行計画が浮上した。実績、考慮要件を整理し、導入時に取るべき施策等について開発途上国に指針を与えようと意図したものである。二年越しでできあがり、昨年暮に発刊された。有償刊行物だけに刊行委員会の承認を得るのに予想以上に時間を要し、記述内容が次々に古くなるのが悩みだった。

さらに７年勤務が現実的になった頃から、「在任中に実プロジェクト立ち上げ」を目標に加えた。これは自分の努力だけではままならない面が多いが少しでもそのための努力をしたいというものである。実プロジェクトはインド、韓国、エジプトで実を結びつつある。同時に、日立のビジネスに役立たないかと内心思ってきた。現在エジプトが 60～100 万ＫＷ級の原発と海水淡水化プラントを作ろうと検討している。これが実現すればビジネスにつながる可能性が出てくるだろう。実はならなくても種かその栄養蒔きにでもつながれば

と毎回カラオケバーに行く。私の曲目に「小西さんのは望郷シリーズですね」と言われる。

[4] やや細かくなるが、前置詞や時制など非英語国民は皆苦手らしく寛容である。私の感覚では、日本人は非英語国民の中では十指に入る英語上手だと思っている。自信をもって良い。非英語国民と付き合うのはその意味で自信を与えてくれる利点がある。

[5] 自慢話に取られないよう願って参考までに私の英語力を示すデータを少々。応募を考える人の参考になれば幸いである。英検一級（優秀賞）、社内英検Ｂ、英国の検定試験最上級、観光ガイド（国家資格）、通訳・翻訳士（民間資格）外国語としての英語（英国検定試験）最上級。最近の TOEFLE のデータは持っていない。国連のプロフィシェンシー資格はウィーンに来てから取得した。

と願っている。

ＩＡＥＡ勤務は残すところ２年、通算７年余りのＩＡＥＡでの経験を帰国後日本で活かす事ができればとの気持ちも湧いてくる。ますます国際化が求められている日本の、特に技術を持って貢献できる人たちに何らかのお手伝いができれば恩返しの一端にでもなろうかと、今後の自分像を描いている。

・公務と旅行

国連に来て他国への出張機会は当然増えた。淡水化、開発途上国のキーワードから想像できるように相手国がウィーンに来てがらっと変わった。それ以前の出張国は滞在経験のある英米の他、仏独加等原子力先進国が主体だった。着任して最初に出かけたのが、アラブ首長国連盟アブダビでの淡水化国際会議だった。以来、各国との原子力淡水化の技術検討会、国際会議でのＩＡＥＡ活動報告等で出かけた国にはエジプト、チュニジア、インド、ロシア、カザクスタン、アルゼンチン、韓国、中国等（順不同）が加わった。

（写真、カイロで開催の会議のあと訪ねたピラミッド）

日独米和にも公務で出かける機会があった。日本へは2000年春の原子力学会に招待を受けてＩＡＥＡ活動報告をした。これらの公務出張には業務用の国連旅券（通称レセパセ）を原則使う。

「所変われば品変わる」で、文化の違いを実感する機会が増える。アブダビやカイロでイスラム世界に初めて接した時の印象は今も鮮明である。祈り、禁酒の戒律には尊敬の念すら持った。安息日が金曜日であって、土曜、日曜は労働日だということもそれまでは知らなかった。そのために失敗もした。開発途上国を訪ねて、日本の豊かさ（少なくとも物質的な）を再認識することにも意味がある。これらの国で水、物、インフラ、いろんなものが足りなくても一所懸命、あるいは、天真爛漫と生活している様を見て、日本の「飽食、喧騒、多忙、世代隔絶」を愁うるのは悲観的すぎるだろうか。日本からのニュースをインタネットで見ていると、暗い話題が余りに多いように感ずる。

一方で、旅には当然私的な楽しみも加わるわけでそれについては次回以降の「生活編」で脇道へ入りたい。

[6] 平壌近くの小村で生まれ、京城経由で引き揚げた。